

眠らない工場

グエン ティ ダン ティー (ベトナム)

あなたは顔さえわからない仕事仲間と一緒に働いたことがありますか？

あなたは他の人が家でぐっすり寝ているとき機械のうるさい音に耐えながら仕事したことがありますか？

それは私の日本での初アルバイトだった。

私はもともと日本のマンガ・アニメ文化などに興味を持っていたが、真剣に日本語を学びたいと決めたきっかけは2011年の東日本大震災である。そのとき、日本人の冷静な対応、忍耐力、そして支え合いに感動して、「なぜ日本人はそんな素晴らしいことができるんだろう。その秘密を知りたい、その民族の心をもっと知りたい。それなら、その民族の言語を学ぶしかない」というふうに強く心に決めて、日本語学習のために留学した。

留学している間はアルバイトもするものだと考えていたが、アルバイト経験が全くなかった私は日本でアルバイトするなら、マクドナルドか喫茶店だろうと思い込んでいた。ところが、現実はそうではなかった。自分でも意外だったが、弁当工場でアルバイトをすることになった。

工場のアルバイトさんになったのは、日本語能力がまだ中級の私には、マクドナルドのホールスタッフになるのは遠い夢だったからだ。お金を稼がないと進学すらも遠い夢になってしまう。「どんな仕事でもいいから、とりあえず経験したい」という考えで先生にアルバイトを紹介されるとすぐ応募した。

そのアルバイト先はコンビニのお弁当、おにぎり、ハンバーガーなどを製造する山の方にある、24時間体制の工場である。

初日、私と他のベトナム人留学生は入場する前に安全ルールのビデオを見せてもらった。ここですごいと思ったのは、日本語だけでなく、中国語・英語・スペイン語・ベトナム語の翻訳もあることだ。それは中国人留学生、ペルー人、ベトナム人留学生の労働者が多いからだ。「まさに国際的な会社だな」と感じた。私は今まで工場でアルバイトをしたこともなかったし、ベトナムでは学生が工場でアルバイトをするのはありえないほど大変なことなので、日本の工場にそのような学生が数多くいるのはとても意外だった。

その工場で驚いたのはそれだけではなかった。

まず、入場専用の制服である。白衣と専用の帽子で体全体を隠さなければいけない。顔もマスクで隠すので、着替えたらまったく別人になってしまうのだ。「私、宇宙人になっちゃった」と発言する人がいても全然大げさではないくらい奇妙な格好だった。そのため、一緒に仕事する人でも、着替えたら誰が誰だかわからない。私は生まれて初めてそのよう

な変な格好をしてあまりにも恥ずかしかったので、鏡に映っている自分を見て情けなかった。

次に、トルトルという道具でほこりなどをとって制服をきれいにしたり、消毒の手洗いをしたりした後、入場することになる。入ったとたん、「人が多い、機械がうるさい」と感じた。そして、青い帽子を被っている社員の方が私たちを「日本語ができる人」と「日本語があまりできない人」の二つグループに分けた。私は日本語ができるグループに入ったが、日本に来て3ヶ月しかたっていないので、実際の作業に入ってすぐ、目の前に沢山お弁当が流れてきて、「肉を広げて」と言われた瞬間、「ヒロゲテ?」という知らない言葉に戸惑うことになった。それで、困った顔をしている私を見て、社員さんは手で見本を示してくれた。「あ、ヒロゲテって、広くするということなんだ」とようやく意味がわかって作業を始めた。しかし、不器用な私は何をしてもうまくできなかったので、何回も交代させられたり、「あ、間に合わない!お前、早くしろ!」と社員さんに怒られたりしてしまった。そして、一つ目の商品が終わるなりまた二つ、三つ目の商品が流れてくるので、息をつく暇もない状況だった。

一日の仕事を終えてあがるとき、みんな死ぬほど疲れた様子だった。日本での初アルバイトについて驚きを隠せなかった人もいた。私は頑張って平気な顔をしていたが、心の中では何かが騒いでいるようだった。

私がこのとき感じていたのは、驚きと失望だったと言えるだろう。なぜ驚いたりがっかりしたりしたかという、私がイメージした日本と現実の日本のギャップがすごかったからだ。私が写真を通じてイメージした日本、姉からもらった可愛いお土産、そしてマンガやアニメで憧れていたその日本、それはこの工場とは全く違うものだった。ここでは、みんな変な制服を着て、機械のスピードを追いかけながら真剣にお弁当を作っている。私がずっと好きだったお弁当は今なら飽きるほどたくさん目の前にあるが、それを見ても、今ではもうワクワクした気持ちは起こらない。

そのように、アルバイト初日はインパクトが強かったのも、そのあと長い日々、寝るたびに夢の中でいつも「肉を広げて、肉を広げて」という社員さんの声が聞こえてきた。

私はこのアルバイトを1年続けた。友達には私が工場アルバイトをしていることを知ると、「へえ、工場は会話もできないし、日本語は上達しないはずだよ。居酒屋のほうが勉強になるよ。」と言った。しかし、そんなことはなかった。沢山の出会いがあったし、色々なことを発見しているうちに自分も少しずつ成長していった気がする。だから最初は「まるで悪夢の世界みたい」と思ったその工場のアルバイトを辞めずに続けられたのだ。

では、その工場で学んだことは何だろうか。

第一に、自分の努力が認められる喜びを知ったことである。不器用だった私なのに、「よくがんばったね」「上手だ」「あなたなら何でもできますよ」とみんなに応援しても

らった。涙が出るほど嬉しかった。それはただの褒め言葉だけでなく、仕事ができる人に対する信頼の言葉である。というのは、仕事をさぼったりおしゃべりばかりしたりする人には社員さんの態度が違うからだ。その仕事ができるようになったことで、私は以前の環境では埋もれていた自分の一面を知ったし、仕事に一生懸命取り組むことで、周りの人とも仲良くなることができた。

仕事ができるようになるためには、努力が必要だ。まずは、職場のマナーである。5分でも遅れたら怒られるし、朝のあいさつは大切だし、みんなで分担してテキパキ仕事を進めることが大切だ。そして、外見より中身だ。最初、宇宙人のような格好を恥ずかしく思ったが、入場するとみんな同じなので、外見を気にするより作業がきちんとできるかどうかの方が大事だ。そして、実際は誰が誰かわからないという訳でもなく、ちゃんと仕事ができる人はみんなによく覚えてもらえる。また、仕事に集中していれば機械のうるさい音は気にならない。そこで、はじめて自分の忍耐力が鍛えられていることにも気づいた。これは嫌、それは無理などと思うよりも、「私がやらないなら、誰がやる？」というふうに思うことで自分の立場に誇りが持てるし、仕事も上手になる。

第二に、日本社会の底力を知ったことである。日本に来る前に「日本人は死ぬほど仕事が好き」と聞いたことがあるが、やはりそうだった。朝起きたら仕事。夜も仕事。

ベトナムと違って、日本には数えきれないほどたくさんコンビニがある。ベトナムでは、朝6時、7時から会社や学校が始まるが、ほとんどは午後5時に終わって、みんな普段11時頃には寝るので、24時間営業のコンビニの需要は少ない。しかし、日本には一人暮らしをしている人が多いし、夜勤が多い仕事もあるため、温かい食べ物や冷たい飲み物などがほしいとき、やはりコンビニは一番の選択肢だ。24時間営業のコンビニに新鮮な商品を出すためには、その商品を製造する工場も24時間仕事があるわけだ。工場は眠らない。そして、日本社会も眠らない。

しかし、眠らないというのは、決して消極的な意味でなく、生き生きしてますます新しいものが生まれるということだ。日本社会は真面目で厳しいかもしれないが、留学生であろうと、国際結婚の人であろうと、日本在住の圧倒的な数の外国人に働くチャンスを与える。社会には、新しい仕事を作り出す力があり、私たちは、社会から必要とされる。一生懸命働けば、価値を認められる。だれでも夢を持てる社会だ。

例の工場には「節電 JAPAN TSUNAMI 未来へみんなでコツコツと実現しましょう」と書いてある張り紙があった。私はその張り紙のことを思い出すたび、「現実には夢じゃないけど、決して悪夢でもない。結局、私の知っている日本、そして、期待している日本はここにあったんだな」と思う。ようやく私も東日本大震災から立ち直れた秘密を、ほんの少しだけ知るようになった。4年前に憧れた、その困難を超える強くて素晴らしい意志は、この眠らない工場にもあったのだ。